

課題番号 67

2者間コミュニケーション特性が社会的排斥に 与える影響に関する神経科学的検討

[1] 組織

代表者：岡本 悠子

(早稲田大学高等研究所)

対応者：杉浦 元亮

(東北大学加齢医学研究所)

研究費：物件費 15 万円

[2] 研究経過

近年、ダイバーシティー・インクルージョンの重要性が指摘される中で、障がい概念も変わりつつある。自閉症にあっても、社会性の障害を自閉症者個人の問題とみる医療モデルの視点から、自閉症者と環境のミスマッチととらえる社会モデルの視点へと転換してきた。一方で、ほとんどの神経科学研究はいまだ自閉症の特性そのものに着目して診断・治療を目指す研究にとどまっている。本申請課題は、自閉症の方が特性を持ったままより良い生活を送れる社会の構築を目指すため、定型発達者が自閉症者をどのような認知するか明らかにすることを目的としている。

2020 年度の研究経過であるが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、代表者所属機関(早稲田大学)・対応者所属機関(東北大学)での出張制限、対面での実験制限が重なり、不確定な中で実験を行うよりも今後研究を行うために必要な、ネットワークの構築と予算取得のための実験課題の再検討を行う方が良いと考え、これらを実施してきた。

● 研究ネットワークの構築

他者の受容には多民族国家か否か、集団主義か個人主義かなど文化や社会の影響を大きく受けると考えられる。そのため、さまざまな国・地域に住む方を対象に比較研究を行うことは重要である。そのため、2020 年度は、国内・国外の共同研究体制の構築に努めた。

● 課題の再構築

また、自閉症者に対する排斥というセンシティブな実験から与える社会への影響を鑑み、研究内容の変更を試みた。

● 研究打ち合わせ

東北大学対応者と研究打ち合わせは Zoom(2 回)およびメールで行い、当研究の方向性について了承を得た。

[3] 成果

(3-1) 研究成果

● 研究ネットワークの構築

国外では、代表者(岡本)を中心とする早稲田大学の研究チームとバーミンガム大学(イギリス)、コネチカット大学(アメリカ)、オークランド工科大学(ニュージーランド)、ニューサウスウェールズ大学(オーストラリア)、マクマスター大学(カナダ)の自閉症研究チームで国際コンソーシアムを構築した。本コンソーシアムは自閉症のダイバーシティー・インクルージョンを達成するため、6ヶ国で国際比較研究を行うものである。現在、現地時間 3/31(日本時間 4/1)にオンラインでのキックオフイベントを開催する準備を進めている。

図 1: 自閉症国際イベントの概要

また、文化や社会は同じ国でも地域によって異なることが知られており(Ogihara 2020)、地域間比較も有用な研究手法のひとつである。国内では別課題にて、東京(玉川大学・国立障害者リハビリテーションセンター)、福井(福井大学)と連携を結び、将来的には日本内の各地域で比較研究を行う準備を整えた。

● 課題の再構築

下記のように課題を組み替えることで、「人は経験によって自閉症を受け入れることができるようになる」というメッセージを発信できるようにした。

おもちゃを1列に並べる、オウム返しをするなどの自閉症児に特有の行動と、おもちゃで遊ぶ、会話をする定型発達児の行動をイラストで表現し、fMRI を用いて各イラストを見ている時の脳活動を評価する。【実

【実験①】自閉症の家族を持つ大学生と自閉症の家族を持たない大学生を対象に課題遂行時の脳活動を計測し、行為の理解や心的状態の把握にかかわる領域の活動が異なることを確認する。また、自閉症に対する印象、自閉症と触れ合った経験を質問紙によって評価し脳活動とこれらの指標が相関するか調べ、自閉症に対する受容的態度にかかわる脳活動が評価できることを確認する。【実験②】自閉症の子を持つ親を対象に縦断研究を行う。2度実験に参加してもらい、同じイラストを見てもらった時の脳活動を計測し、自閉症に特有の行動を表現したイラストを見ている時の行為理解・心的状態の把握にかかわる脳部位の活動が、2度目の実験で増加するか明らかにする。さらに、親のメンタルヘルスを鬱・不安の尺度を用いて評価し脳活動と相関するか調べることで、自閉症に対する受容的態度が自閉症の子を持つ親のメンタルヘルスにつながるか明らかにする。子育てを通して自閉症のことを知る経験を通して、自閉症児特有の行動を見たときに、行為の理解や心的状態の把握にかかわる脳部位の活動が増強すると予想される。一方で、育児の中で自分の子どもが障害を持つことを受け入れることができない親がいることも事実であり、このような育児における葛藤にも影響を受けると予想される。

図2: 課題の詳細



● 公的資金への申請準備

現在、2021年度4月に国際共同研究加速基金国際共同研究強化Bの申請するための国内国際連携、および課題の準備を進めた。

(3-2) 波及効果と発展性など

2020年度は、国内国外の自閉症研究チームとの連携、市民参加型国際イベントの実施など研究者ネットワークの拡大を行った。2021年度は国際共同研究を行うための予算申請、実験①のfMRI撮像を行っていく。さらに、さまざまな国・地域で本課題ができるよう、研究のネットワークを広げていく。

[4] 成果資料

U21 Autism Research Network:

<https://www.u21autismresearchnetwork.co.uk/>